
School=MonsterHouse

マル丸円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

School Monster House

【Nコード】

N8442E

【作者名】

マル丸円

【あらすじ】

モンスターハンターそれは俺が今はまっているゲームのタイトルだゲームのはずだったのに今目の前にいるのは火竜リオレウス・・・ウソだろ？

1話（前書き）

突如学校にモンスターハンターのモンスターが出現するというお話です。

読んだら感想や批評お願いします。

頂けたら機動力かなり上がるんで・・・。

1話

俺は今、戦っている。

恐ろしい炎を吐き出す龍と戦っている。

龍が突進してきた。だが俺はそれをすかさず回避し、突進した勢いで転んだ龍に切りかかる。

一閃・俺の身の丈ほどもある大きな刀が、龍の尾を切り裂き、胴体と分離させた。

龍は痛そうにもがくが、俺は躊躇せずに刀を振り上げ、今度は頭を切り裂く。

龍は生を止めた。

．
．
．
チャットキャラチャー 俺の緊張感は画面の中の龍を倒すことで、
無くなった。

そう俺はゲームをしていたのだ。

そのゲームは、龍を倒し、その龍から剥ぎ取った素材や集めた素材

などで、さらに強い武器を作り、さらに強い龍と戦う。そういうゲーム。ただそんなことをしているだけのゲームなのだが、なぜかすごい魅力を感じる。不思議なゲーム。

今現在の俺の唯一の楽しみがこのゲームなのである。

そのゲームの題名はこういう・・・【MONSTER HUNTER
R】

「さてと、学校いくか」そう呟くと、ゲームの電源を切り俺は自分の部屋を出た。

ケータイの時間を確認すると現在午前8時・・・遅刻だ。昨日の夜、軽い気持ちではじめたゲームに、つい熱中してしまった。我ながら反省。

4

リビングに行くと置手紙とその上に千円札が一枚置いてあった。

「リックへ お母さん今日相手側の社長さんたちと接待ゴルフ行くから早いので、だからこの千円でご飯適当にたべてね」バリバリのキャリアウーマンの母親の手紙には、ごく丁寧なことに文の最後にハートマークがついている。

ちなみに俺の名前は陸アキツキって名前だ、アキツキ陸結構覚えやすいと言われる。

現在高校2年生部活には入っていない。

「ふうん」机の上の千円を掴み、俺は部屋を出て行った。

家から学校へ行く間には、コンビニがある、大手チェーン店のエイトイレブンである。

学校へ行くにしても、腹が減って授業どころではないので、朝飯と昼飯を買いに来た。

ドアの前に来て入るかどうか躊躇ってしまった。なぜかという店の中にあいつがいたからだ。

次の瞬間あいつと目が合ってしまった。

俺はその場を逃げるように立ち去ろうとした。だが、目の合ったあいつは、俺を逃がすまいと、店の外にでて、俺の名前を叫ぶ。

「リク！！」聞きなれた声、昔はこの声で自分の名前を呼ばれると心地よかった。でもあの事件以来だ、この声が俺を責めているように聞こえ始めたのは……。

「……」俺は何も言わずに歩を進める。

「まってよりク！なんで逃げようとするの？エイトに用事あるんでしょ？」俺は歩を止めて振り返った。

「俺には、お前にもあいつにも合わせる顔なんかない」美里・・・俺とアイツの幼馴染で昔はみんなよく遊んだが今となっては……

応俺と同じ高2だが、こいつのほうがよっぽど大人らしい。

「そんなこと言わないでよ。あのことは、リクのせいじゃないでしょ？」こいつは何も分かってない。あいつの光を奪ったのは俺なのに……。

「悪い・・・美里、でもどんなこと言っただって俺のせいだ・・・じゃあ俺はきびすを返し、再び足を学校に進めた。」

「リク・・・」美里はすべてを背負っているつもりでいる幼馴染の背中をただ見ていた。

朝から気分が悪いのは、多分寝ずにゲームをやっていたせいだ、絶対そう。

自己診断をしているうちに、教室に着き自分の席に着くとその勢いで机に突っ伏した。

俺は気分が冴えない頭を回すのはやめ寝ることにしたのだ。

そして寝ていなかったからか、俺はすぐに眠りの世界に誘われていた。

ぐおおおおおおおおおつおおつおおつおおつおおつおおお！！！！！！！！！！

耳を劈く咆哮。それは、聞き覚えがあつた、どこで聞いたかはイマイチ思い出せないがつい最近俺はその咆哮を聞いたことがあるような気がした。

そして俺はその咆哮によって目が覚めた。

「うおおお！！」咆哮にビビった俺は、思わず立ち上がり、叫び声を上げてしまった。

運悪く今は授業中、周りは木の葉の落ちる音が聞こえそうなくらい静まり返っていた。

「くおらあ！！！！アカツキイイ！！！！てめえちよつと廊下来い！！！！」ホントに運が悪い、その授業の担任はこともあるつに、学校一恐ろしい面と体を持つ、国語教師橘だった。

俺はその後、授業が終わるまで、廊下で説教された。その間クラスメイトたちは、教室で自習。うらやましい・・・だが自業自得。自分の責任なので、うらやむのはやめた。

寝る前もかなりの疲れだったのに、説教を食らいさらに疲れてしまった俺に対し、ますます追い討ちをかけた。それは次の授業。

「じゃあみんな、胴着に着替えたらもう一度ここに集合してください」そこは学校の剣道場。もう二度とこないと決めていた場所……。だが俺は授業のことをすっかり忘れていた。

授業とはいえ、ここに来るとあの事件のことがどうしても頭をよぎる。

「ああそうそう、知ってるとは思うが今日は3年と合同授業だ。ちよつどいい機会だから皆一度3年と戦うように」は？なんだって？3年と合同授業？ふざけんな。3年にはアイツがいる。

「なあ森」近くにいた眼鏡のクラスメイトに声をかける。

「なに？」

「3年つて何組？」

「1組だよ」

「ああそうかありがと」ありえない・・・最悪だ。

頭を抱えながら、更衣室に入ると案の定・・・そいつはいた、会いたくなかった。

「晃太・・・」俺の目の先には左目に眼帯をした少年が着替えていた。

どつやら、思わず声に出た名前がアイツ・・晃太に聞こえてしまったらしい。こちらに気付いてしまった。

唯一残る、右目を皿のようにして俺を見る。

「陸・・・」向こうも俺の名前を呟いた。

俺は急に罪悪感と嫌悪感を感じ思わず目をそむけた。

1話終

1話（後書き）

主人公は暁陸君アカツキリクですモデルはやけに短気なわが友人。5%も使っていないけど

1話だけでも読んでいただけたら幸いです。あとがきまでたどり着いた方々ありがとうございます。

2話

俺には仲のいい幼馴染が2人いる。出雲美里と古谷晃太だ。美里は俺と同じ学年で、晃太は一つ上の学年になる。

家は近所だったから結構よく遊んでいた。

小学3年生のある日、俺は母さんから「剣道やってみない？」と言われるが、はつきり言って全然やりたくなかった。

俺ははつきり言ってやる「ヤダ」。だが母さんはそう言うってくるのを待ってましたとばかりに俺に言い返す。「美里ちゃんや晃太君も来るのになあ〜」そう言われると断れないのを、母さんは知っていた。最悪な親だとあの時は思ったが、今となってはあの言葉に感謝している。

そして俺と美里と晃太は剣道をやることになった。

それから2年、俺と美里が5年で晃太が6年のころには、自慢じゃないが俺たち3人が表彰台に絡まないことは無かった。そしてこの頃には、俺は剣道が世界で一番好きになっていた。

中学生になった。でも俺たちは剣道で推薦を受けていた別々の学校に入学することになったが、俺たちの付き合いが減ることは無かった。休日に近所の道場を借りて一緒に練習したり、俺や美里の家で遊んだり。

学校の友人より全然仲が良かった。

そんな中学2年生の夏。俺は県大会の決勝で晃太と戦うことになった。そのとき別の場所で女子の部をやっていたはずの美里も見ていたっけ。

中学に入ってからこういう公の場で試合をしたのはこれで7回目になる。ちなみに今までの戦績は3対3この試合は晃太の中学生最後の試合だったが、負けてやる気はもちろんなかった。

一本目は思いのほか一瞬で終わった。籠手フェイントをして、面に持っていく予定だったが、晃太に見抜かれ、胴をとられた。

二本目は試合終了間近で決まる、俺が面を打ったがそれは防がれる、強いあたりを晃太にしてやったら、思いのほか晃太は、バランスを崩しよるめく、俺はその一瞬の隙を見逃さずに、面を入れ一本を入れた。

そして勝負。それはホントに一瞬だった。始めの合図が掛かった瞬間に晃太が突っ込んできたのだ。俺は反応できずにそのまま面に一本入れられてしまった。

それから2年俺たちは一緒に通おうと決めていた剣道県下最強と言われる、公立坑道高等学校に待つ晃太を追いかけ美里と一緒にそろって入学した。

そして事件は起こった。

•

•

「ねえ、暁！」急に我に返る。そこにはクラスメイトの岡部がいた。
「なんだよオカマ」オカマというのはこいつのあだ名だ。じっさいは分からないが喋り方がオカマなのだ。

「そのあだ名いい加減にしてくれない？勘違いされるのよ」勘違いも何も・・・喋り方がもう・・・。

「まあいいだろ。で？なんだ？」

「あなたなんかさつきから辛気臭い顔してるから、どうしたのかな？って思っただけよ」昔を思い出していたなんていったら、間違いなくバカにされるのがオチだ。

「さつきの説教で苛ついてんだよ。それより着替えも終わったしもういこうぜ。」最後に袴の帯を締め、俺の準備は完了した。

「やっぱり、元剣道部は違うわねえ、私なんか袴の縛り方全然わかんないわよ」オカマのこの発言により俺の機嫌の悪さは最高潮になった。

「うるせえ、もうしゃべんな・・・」オカマに吐き捨てると、俺は出口付近に置いてあった、授業用竹刀の一本を持つと、更衣室の外にでた。

更衣室を出たが、道場には誰もいなかった。

「一年ぶりか・・・」思わず呟いてしまった。この目に見える景色が、少し汗臭いながらもいい気持ちにさせてくれるにおいが、剣道をやっていた頃のことを思い出させてくれる。

「そうだな」右から不意に、声が聞こえ、思わずびくっとなる。

「浅葱先生・・・」声の方向に目をやると、そこには初老の先生がパイプイスに座っていた。

「久しぶりだな。校内でも見かけんから心配してたんだぞ」浅葱先生は、剣道部の顧問だ。入部したばかりのときかなりお世話になった記憶がある。

「そうですね、勝手なことばかりしてすみませんでした」

「あんなことが、あつたんだ無理もない」

「・・・失礼します」失礼するといつても、浅葱先生と同じ道場にいるからあまり意味は無いのだが、これ以上話していると、どうでもいい感情を思ってしまうのでとりあえず逃げた。

そして10分後。授業が始まり、問題もなくスムーズに進んでいった。

ある程度の基本的な練習が終わったところで、浅葱先生の号令が掛かる。

「それじゃあ、試合入るから、2年生は近くにいて、3年生と組め。試合が終わったら各自着替えて解散だ」

合同だから3年と組むのか、面倒だな。手ごろな奴探して負けてやるか。

俺は、とりあえず後ろにいた奴の肩を叩く。

「先輩、やってもらえませんか？」3年生には区別がつくように、胴の後ろ紐のところに赤いタスキが付けられているのですぐ分かった。

「ん？」俺が声を掛けた先輩が、振り向く。そして振り向いた瞬間、俺は後悔した。

「晃太・・・」面の向こう側には、俺のもっとも償わなければいけない奴がいた。左目に眼帯をして、剣道部員には珍しい短い金髪は手ぬぐいから少しはみだしている。

「陸・・・」やば・・・ミスった。俺は後ろを向いて、歩き出す。

「までよ」晃太の手が俺の肩を掴む。

「2年は3年と組むんだ。どうせこのクラスでお前に勝てるのは俺ぐらいなんだ」

「何が言いたいんだよ。晃太」とりあえずガン付け。思いつきり睨んでやる。

「俺と戦え。手加減無しだ」まだ逃げ道は無いか探すのが、周りの2、3年は皆もつくんでしまつて逃げ道が無いことを悟つた。

「はあ・・・」諦めた。

「それじゃあ始めっ！！！」浅葱先生の号令とともに交流試合が始まつた。

俺と晃太は同時に立ち上がる。

「どついつつもりで、俺に勝負吹っかけてきたんだ？」のこつた右目が俺を睨みつける。

「理由なんか無いつて、後ろの3年に声かけたらお前だっただけだよ」俺もとりあえず全力で睨み返す。

「ふうん」言い終えた瞬間、強力な踏み込みと共に、晃太はまっすぐに面を突いてくる。普通なら【打つ】のだが、晃太の場合は【突く】のほうがしつくり来る。

「くっ！」晃太の凄まじい速さの打ちならぬ突きを、竹刀で右に打

ち返すと、そのまま籠手を叩く、だがこの攻撃方法は簡単に読まれ、素早く切り返された竹刀でガードされる。

心の中で軽く舌打ちする。いったん距離をとり、カウンター目的で、晃太の攻撃を待つ。

案の定、すぐに打ち込んでくる晃太。晃太の狙った打突部位は面。また凄まじい速さの面が来た。胴を打つにも隙が無く、竹刀でガードする。次の瞬間激しい当たりで思わずよろめいてしまう。

「メェン!!!」一瞬・・・ほんの一瞬よろめいただけだったのだが、その瞬間を引き面で取られた。非の打ち所がない完璧な面。

「くっ・・・」鈍い痛みがじんわりとくる。

「やっぱりお前は剣道やってないとつまんねえよ・・・」悲しい声だった。晃太の目を見ると、悲しそうな目で俺を見ていた。

「お前が責任を取る必要なんか無い。いつでも戻ってこいよ。いまでも剣道部の連中はお前を待ってたから。もちろん美里も。」涙腺が緩む。でも、なぜか心には悔しいと思う心があった。

「あつそ」流れそうな涙を我慢しながら、後ろに下がり、正座すると、面を外す。

そして、ちょうど面を外した瞬間だった。

ギヤおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!

さっきの夢と同じ咆哮、だがさっきと違うのがそれが夢じゃなく現

実だったということ。周りの生徒達は何事かと、咆哮の聞こえた校庭を見る。

それを見た生徒達は凍りつく。

俺も、ソレを見た瞬間、凍りついた。おそらくこれを見て凍りつかない人間はいないと思う、もし凍りつかなかつたら、それは、ゲームのハンターだけだ。

「リオ・レウス・・・」空に出来た亀裂から赤い翼、刺々しい尻尾、真紅の瞳をもつ、ゲームの存在だと思っていたものがでてきた。

「ありえねえって・・・」全身の汗腺から冷たい汗が出るのを感じた。

2話（後書き）

晃太君です。名前の一部はクラスメイトから・・・なんかそんな
ばっかです。

美里ちゃんは名前だけクラスメイト・・・ほんと何やってんだろ俺。
まあ楽しくかけたんでいいということ！感想批評お願いします！
！！

3話

>何だよアレ？<>あれってモンハンの？<剣道場は亀裂から現れた炎竜のせい、混乱している。そしてモンスターハンターを知っている生徒は、興奮している。

そしてそういう俺も興奮している1人だ。だって、あのゲームの中で一番好きな竜が今俺の目の前にいるんだ。興奮しないほうがおかしい。

「ねえねえ、暁」グランドの上空を悠然と旋回しながら飛ぶ炎竜を呆然と眺める俺は後ろからの声で我に返る。

「なんだよオカマ」振り返るとオカマ・いや岡部がワクワクした顔を面の隙間から俺に見せていた。

「あ、あれってリオレウスよね？ね？」目を見開き、なぜか中に星が見える。そういえばこいつも、俺と同じでモンハン大好きなんだっけ？

「おお、でも信じられねえ、あれはゲームキャラだろ？」そう、ゲームのキャラだ。現実にいるわけがない。じゃあなんだ？ロボット？立体映像？

「んなこと、私が知ったこっちゃ無いわよ。それより、外に出てみてください」周りをみると、生徒が剣道場の外に出て行っている。それにしてもこの岡部って野郎は喋り方がキモいのだがなぜか友達が多い。まあ今はそんなことどうでもいい。行きたい！

「いや、それはいい」あれ？なんで、断ったんだ？行きたかったはずなのに？

「ふうん。連れないわねえ」岡部はそう呟くと、面をつけたまま、剣道場の外に出て行く。

「わるいな」振り返るとニコニコした顔の晃太がいた。頭に手ぬぐいを巻いている。面はとったようだ。

「なあ、陸あれなんだよ？かつこいいいなオイ」なれなれしい・・・。てかテンション上がってんなあ。

「ゲームのキャラだよ、なんでここにいるのか全然わかんないけど」なんか昔のテンションで返事を返してしまった。二度と話さないと決めてたのにな。

「3D映像とかロボットじゃねえのか？」同じこと考えてやがるよ。

「俺も考えたけど、ぜんぜんわかんねえよ」いまの科学でアレが出来るとか出来ないとかいうのは、アナログのおれには全然わかんない。

「とりあえず浅葱先生の支持を仰ぐかあ」晃太はニコニコしながら辺りを見回す。

なんか変だな？こんな騒いでるのに、なんで浅葱先生はなんも言わないんだろ。

「あつれえ〜先生どこいったんだろ？」晃太の不思議に思う声が聞こえてくる。

「居ないわけないだろ。更衣室にでもいるんじゃないのか？」軽くあしらうと、晃太は更衣室に向かった。

・・・なんかさつきから胸の辺りがさつきからゾワゾワする。こつこつ言っの何て言ったっけ？

「おい陸！来てくれ！」唐突に晃太の声が響いた。見ると晃太が更衣室の中で、何かを見ているようだ。

更衣室の中では、晃太が紙を見て、呆然と立っていた。

「なんだよ、晃太」晃太は、何も言わずに、見ていた紙を俺の前に突き出した。

紙を見た俺は絶句した。

「晃太・陸、お前たちの目の前には今赤い竜がいるだろうと思う。私がお前たちに干渉するのは禁じられているんだが、私はお前たちがどうしても、嫌いになれない。だからこつこつやっ生きて残る術をお前たちに残すことにした。」

「何だよ、これ」字は印刷されたものようだが、間違いなく浅葱先生が残していったものだった。

「今日、この授業が終わると共に、赤い竜と小さな竜がすべてで250体、校内に放たれる。」

「あの竜はロボットでも、3D映像でもない。・・本物だ」晃太は力なく答える。

「そして、放たれると同時に、この学校の敷地は、この世界から隔絶される。外部との連絡は一切断たれる。もちろん外にも出られない。」

「先生たちは知っていたんだ。知っていて、平然としていたのか？俺たち見捨てられたのか？」顔が俯く。

「奴らはすべて、本物だ。油断して近づけば死ぬ。」

「見捨てられて・・死ぬのか？」晃太の肩が震え始めた。

「選択肢は二つ。何もせず死ぬか・・戦うか。」

「晃太。俺は・・戦う」俺は、一枚の紙切れを、ぐしゃぐしゃに丸めゴミ箱に放り投げる。

「はっ？」うつむいた顔が上がり、驚いた顔で俺の顔を見る。

「戦うって言うてんだ。たとえ先生が俺たちを、見殺しにしたとしても、この紙を見る限りじゃ、先生は俺たちに死ねって言うてるんじゃない。最初にも書いてあるだろ嫌いになれないって。だから俺は俺たちを嫌いじゃないって言うてくれた。先生を信じる。・・・それに俺には、生きて償わなきゃいけないことがあるんだよ。だからおれは戦う」

「陸・・・」俺は償わなきゃいけない。晃太の目の事。美里をなかせちまったこと。浅葱先生を裏切っちまったこと。

うわああ！ 次の瞬間更衣室の外、多分剣道場の入り口のほうから、叫び声が聞こえた。

「ちっ、来たか」俺は、舌打ちすると、更衣室の奥にある、清掃用具入れをこじ開ける。

「更衣室の奥にある清掃用具入れを開ければ。戦う術がある。校内にはいろんな場所に、武器が隠されている。晃太、陸、戦って・・・生きてくれ。」
浅葱

「おらよ、晃太」晃太に戦う術を投げる。

「陸、これって・・・刀？」清掃用具入れの中に入っていた、3本の刀の中で、一番長い刀を晃太に投げた。

「俺はこいつ」もう2本の刀は、脇差よりもう15センチ程長い刀。赤い鞘と黒い鞘。

「でも、俺は・・・」手に持った刀をじつと見る晃太。

「俺は・・・償わなきゃいけない人間にも、生きていて欲しいんだよ」迷う晃太の隣をすり抜け、更衣室の扉のノブを握る。

ドアを開けた瞬間、生徒が更衣室になだれ込んできた。

「うわっ！」俺は後ろに吹っ飛ばされ、更衣室の、壁に叩きつけた。
れた。

「陸！大丈夫か？」晃太が駆け寄ってきた。

「いつてえなあ！！んだテメエら！」なだれ込んできた生徒は、1

0人ほど。岡部もいた。

5人ほどが、更衣室の扉を空かないように抑えている。

>開けてくれ！このままじゃ食われちまう！！<<助けてくれ！<扉の向こうから、取り残された生徒であるう声が、扉を叩く音と共に聞こえた。

「暁、こんなところにいたの？」岡部が、俺と晃太に気づき、よってきた。

「ああ、ちよつと先輩と話してたんだよ。・・・それより、この騒ぎって・・・」

「そうなのよお！外でリオレウス見てたら、急に校門のほうから、ランポスがいつぱい来たの！」

「陸、ランポスって？」

「小型の恐竜みたいな奴だよ、こいつの試し斬りにちようどいいだろ？」俺は、黒い鞘に入った刀を抜く、刀身は漆黒ともいえるほどの黒だった。

「暁、何ソレ？まさか、戦う気？無理よ、ランポスっていったって、私の想像より、全然大きかったわよ？」俺は、黒い刀を背中の胴を固定する紐に当て、そのまま、切り落とす、胴は床にガタという音と落ち、胴着に、たれをつけただけの状態になる。

「無理だと思つたら、こんなことしねえよ」俺は、正直ワクワクしている、ゲームをしている間も、本物のこいつらと戦えたらどんなにいいかと、何度も思った。これがたとえ、誰かを犠牲にしなくちゃいけないことでも……。そのことがかなうなら、あいつらに食われてもいいと心の底から思っている。

「陸」晃太が呼ぶ、振り返ると刀を持った手が震えていた。

「この震えが止まったらさ……。行くから」

「……おう」言葉を返すと、俺は、ドアを押さえている連中を片っ端から蹴り飛ばした。

「邪魔だ」全員蹴り飛ばすと、またも生徒がなだれ込んできた。今度は怪我をしている奴もいる。

生徒のなだれが止んだところで、外に出る。

悲惨な光景というのは、こついつことを言うのだと、知った。

所どころに、血や胴着の切れ端、肉片のようなものまで落ちている。うずくまる生徒が数人。そして、目を走らせていくと、剣道場の真ん中で、ランポスが2体、何かをむさぼっていた。

「うつ」ランポスがむさぼっているものの正体が分かった瞬間ものすごい吐き気が襲ってくる。思わず刀を持った右手で、口を覆った。

ゾクツ 背筋に悪寒が走る。右側に何かがある。振り向くと、襲いかかろうと爪を振り上げる、ランポスがいた。

「ちっ！」左側に転がり避ける。

ギャアアオ ランポスの爪は空振り、宙を切る。

俺は瞬間的に体制を立てなおし、次の攻撃が来る前に、ランポスに黒い刀で切りつける。

スツ 首を切りつけた、人間のそれより濃い色のランポスの血が、吹き出す。どうやら人間で言う頸動脈を切りつけたようだった。でも傷口は浅い。

グワアアア 断末魔の叫びとはこのことを言うのだなと、俺は理解した。

「おとなしく死んでろ！！」左手に持っていた、赤い鞘の刀を抜く。刀身は思ったとおり赤かった。

ズシャ 今度は、胴体を狙って攻撃する。今度は、刃が深くまで入り、ランポスは崩れ落ちる。

ギャ・・・ランポスの生が消えた。ぎょろりとした目は白目をむき出している。

ハアハアハア・・・疲れる。俺は、床に膝をついた。

赤い刀に目をやる。赤いはずの刀身は、血を浴びて、濃い紅色になっていた。

黒い刀は怪しい光を放っていた。

ゾクツ　また背筋に悪寒が走った。振り返ると、剣道場にいた、残り2匹のランポスが、襲い掛かってくる。

やばい、避けられ……。

バサツ！　血が飛び散る。あれ？痛くない？死ぬときってこんなもんなのかな？

「おらっ！ぼさっとしてんじゃねえよ！！」それは救いの声だった。

「晃太！？」晃太に渡した長い刀に血が滴る。

「何してる、さっさと立て、めえの首も切り落とすぞ！」晃太は震えが止まっていた。目には、闘志をたぎらせている。

「あ・ああ！」立ち上がると、2つの刀を振り、血をはらう。

「俺は、償ってもらわなきゃいけない人間がいるんだ！死んでもらっちゃ困るだろ？」

「ああ、そうだな！」刀を構える。首元を軽く切られ、ひるんでいたランポスも戦闘態勢に入っていた。

「おりやあ！」晃太が考え無しにつっこんでいく。右側のランポスの喉元に鋭い突きを食らわせ、回してねじ込んだ後、引き抜く。

ブシャア　ものすごい量の血が溢れる。右側のランポスは叫ぶ間もなく、その場に崩れた。

エグイ……なんかこいつのやり方はかなりエグイ。

「次！」今度は、下から切り上げられた刀が残ったランポスを襲う。ズシヤア 長い刀身が、ランポスの体を、真つ二つにした。そう、文字通り真つ二つにされたのだ。胴体が2つに割れ、頭が付いたほうに先に落ち、頭の無い方は、少し後に床に崩れた。切り口から内臓のようなものが垂れる。

俺は、構えたまま、呆然とそれを見ていた。

思い出した・・・こいつは・・・晃太は・・・刀っぽいものを持つと、豹変するのだ。試合や練習の時はもちろん。こいつが竹刀やら木刀を持つとろくな事がない。前に、俺がチンピラ相手に喧嘩したとき、たまたま、通りかかった晃太が、木刀を持っていて、最初はびびっていたが、構えた瞬間その目には殺意がこもった。気が付けば俺と晃太で、5人いたチンピラをすべて気絶させていたのだ。

晃太は血の付いた刀を袴で拭いて、鞘に収めた。

収めた瞬間、その場に尻から倒れこんだ。

「ああゝびびったあゝ」性格が変わった。というかランポスなんかより、豹変したこいつの方が、かなり怖い。

「はあ・・・」俺は、尻餅をついている、晃太の隣に行き、手を差し伸べる。

「ほらよ、まだあと、247匹残ってたんだ、こんなところでへばってんなよ晃太」差し出した手を使って、立ち上がる晃太。

「そつだなあ〜まあ頑張るか」

3話（後書き）

オカマくんは前回から登場してますね
意外と気に入ってるけど彼が目立つのはまだまだ先です
そしてとうとう戦闘に入ってきました
まだまだ未熟ですがどうかお願いします
感想批評お待ちします

4話

高校に入るとき、晃太以外に負けてやる気は無かった。そして、自信過剰だと言うかもしれないけど、晃太以外に負けるなんてことは無いと思ってた。

でも現実には厳しくて、やっぱり先輩には負けていた。でも負けていたのは3年の先輩で、2年の先輩では、晃太以外誰にも負けなかった。

太陽の照りつける夏休みのある日。3年生は顧問の浅葱先生と遠征に行っていて居なかった。

先生が居ないので自主練習、2年の先輩が連絡網で言っていた朝7時に道場に着いた。

道場に入り一礼をした瞬間、隣から伸びた手で俺の口がふさがれ、もう片方から出た足で払われ、その場に前のめりに倒れた

何人かに、背中に乗られてさらに手足を押さえつけられる。髪をわしづかみにされてそのまま床に頭を押し付けられた。

「アカツキイ・・・君・・・生意気」聞き覚えのある声だった。

「んだよ・・・てめえ・・・」なんとか一言言うのがやっとだった。

「ということ、これから制裁だからよろしく」わかった。

「岡崎か？」怒りを込めて言う。岡崎は一応先輩で、入ったばかりの頃、俺や他の一年生に「稽古つけてやるよ」とか言って、一年生をいじめていた記憶がある。でも俺は逆に負かしてやった。

だがそれが奴の気に触ったのか、岡崎はそれ以来俺に対して、嫌がらせみたいなことを散々してきた。試合中足をかけてきたり、校内で肩をぶつけてきたり・でも俺は、足をかけてきたら、逆に転ばしてやつたり、肩をぶつけてきたら避けたりと、岡崎の奴はホントにガキだと思った。

「黙ってるよ」頭を持ち上げられ、床に叩きつけられる。俺の中で何かが切れた。

「くっそつがぁー！！」押さえつけられている体を無理やり起こす、岡崎は俺の上に乗っていた、野郎どもと床に落ちる。

俺は近くに立てかけてあった木刀に手を掛けた。

「こんな事してただで済むと思うなよ？」木刀を振り上げ、振り下ろす。

「陸っ！！」俺と岡崎の間に俺の名前を呼びながら、誰かが割り込んできた。

ガスッ

晃太は救急車で運ばれていった。左目から血を出しながら・・・。

ランポスとの戦闘から、20分ほど経った。俺と晃太は、制服に着替え、これから何をするかを相談していた。

浅葱先生が残した、戦えという2文字がさっきから頭の中をぐるぐる回っていた。

「陸、まずは美里を助けに行こう」軽い放心状態だった俺の頭を、晃太が引き戻す。

「えっ？あつ・・・ああ」美里か・・・そういえば今日の朝もひどい事言っちゃまったよな。

剣道場の床から視線を外し、窓から空を見た。雲行きが怪しい。雨が降りそうだ。

“なんで晃太は怒らないんだろう？”あの日からずっと気になっていたことだった。晃太は片目が潰されたのに、なんで怒らないんだ？美里は俺の胸倉をつかんで怒鳴りつけてきたのに、こいつは・・・晃太は一回も俺を怒らなかった。胸倉をつかんで、殴り飛ばされたっておかしくないことをしたのに・・・おかしかったのはそれだけではなかった。晃太の家のオジサンやオバサンも俺を怒らなかったのだ。正直俺は気分が悪かった。

不意に背中をバシツッと叩かれ、前に倒れそうなのを踏ん張った。

「陸、どうした？さつきから。まさかアレ見て怖気づいたか？」晃太はそう言っ、入り口付近のシートに眼を移す。

さつきランポスにやられた生徒の遺体だった。無残にもはらわたを食いちぎられ、見れる姿じゃなく、とりあえずそこらへんにあったシートを被せた。

「ちよつとだけな」たしかに怖い。でも死体が怖いわけじゃない、俺たちもそうなるのかもしれないと考えたらぞつとするんだ。

「死ぬこと覚悟しなきゃ、刀もまともに振れねえだろ？そんなこと気にしてる暇あつたら、どうやつたら生きられるかかんがえる」晃太の眼の光が濁ったのを俺は見逃さなかった。俺も晃太も人が死んだことを簡単に割り切れるような残酷な人間じゃない。

「そうだな・・・たしか美里のクラスって2・5だよな？」

「ああ、近くの校舎入口から入って、階段のぼればすぐに着く」晃太はフツと少し笑う。

「どうした晃太？」

「お前とこんなふう話すのなんて何年ぶりかなと思っさ・・・俺の心から沸き出たのは罪悪感・・・俺には晃太と楽しく会話する資格なんて・・・ない・・・」

「わるい・・・俺にお前と話す資格なんてねえよな・・・嫌だつたら一人で美里のここに行くってくれよ」ハツとした晃太は気まずそうにこ

つちを見て沈黙・・・。

お互いに気まずくなりそのまま沈黙になる。

沈黙を破ったのは、意外な人間だった。

「あの・・・暁君？」控え目に右手をあげて四角い黒縁めがねを通して俺を見るのは、森だった。他の生徒はビビッて更衣室に入ってしまったている。

「なっ、なんだよ森」森は左手を俺の前に持つてくる。そこには、ガンマンが腰につけるような、銃のホルダー付きのベルト。そしてそこには黒い銃が2丁、腰の両側あたりにあるホルダーにはめられていた。

「それ・・・どうした？」

「着替えの制服の上に置いてあったんだけど・・・」そういえば森の奴、胴着に着替えただけ、端で休んでたんだっけ。

「服の上って・・・じゃあ誰かが君にその銃を預けたの？」森の制服の上に、銃を置いたのはたぶん浅葱先生だ。銃だったら普通目がいいやつに預けるものじゃないのか？しかも、森とは一年の時から同じクラスだけど、勉強ばかりで運動もろくにできないし、俺が見るところ、相当のビビリ症だ。もし浅葱先生がこいつを選んだとしたら、それは大きな間違いだろう。

「晃太。たぶん浅葱先生だ。でももしそうなら、森にも戦ってもら
う」

「えっ?! 戦うって、僕こんなもの持ったことありませんよ!! それにさっきの恐竜みたいなのと戦ったら死んじゃうじゃないですか!!」 晃太が目をむき出しにしている森の肩を叩きながら、なだめる。

「森君だっけ? 君メガネかけてるけど、視力は?」

「3・5です」 チャキと黒縁めがねの真ん中を人差し指で持ち上げる。いや待て、こいつはいま何と言った?

「眼球の大きさを聞いてるんじゃないんだよ? 森くん」

「先輩は意外としつこい人なんです。視力が3・5なんですよ」
間違い無いらしい。

俺は晃太と目でしばし会話。

会話が終わると、森の両肩をそれぞれ掴んだ。

「行くぞ」 間違い無いだろう。森は浅葱先生に推薦されたんだ。この視力のよさと、黒い二丁拳銃が証拠だろう。

「えっ? ちょ、ちょっと待ってください暁君!!」

「森! お前は選ばれたんだよ」

「君はその銃で戦うんだ。ああなりたくなかったらね」 晃太は今ももう動かない生徒の死体を指す。

「ひいっ!」 シートが掛けられていて死体が見えないのに森は情け

ない声を出しながらその場に座り込んでしまう。

「むっ、無理です！僕にはそんな怖いこと・・・でっ、出来ません！」「手に持っていた、銃とホルダーを投げ捨てる。投げ捨てられた銃とホルダーの叩きつけられる音が響くと同時に、また雄叫びが聞こえた。

『ギヤオオオオ！』 剣道場の入口から聞こえた雄叫びの正体はランポス。それも先ほどの数よりさらに多い。

「なんなんだよ！！」ぞろぞろと入り込んでくるランポスたちに反応して、とつさに腰に挿してあった黒刀と赤刀を抜く。隣にいた晃太も背中の中を抜いた。

「ひっ、ひい！！」

「いいじゃあねえかよ！さっきよりも殺しがいがある！」刀を抜いて豹変した晃太が、ランポスの群れに突っ込んでいく。

「森、お前はさっきの拳銃取ってこい。撃たなくてもいいから、とりあえず持つてろ！」突っ込んだ、晃太の後を追う、俺も突っ込む。見た感じの数はとりあえず十頭くらい。晃太で俺3くらいだろうか？

あと数歩で群れの目の前というところで、血飛沫が一つあがった。

「一匹目え！」見ると晃太が既に一頭仕留めていた。もしかしたらこのまま、全部殺してくれるかもしれない。

俺は目の前のランポス一頭に狙いをつけ、右手に持つ赤刀を振るう。

ランポスが後ろに跳び、避けられる。

追撃をかけようとさらに踏み込むと、後ろに飛んだランポスが、もう一度こつちに飛んできた。大きく開かれた口には涎が充満した口内と、鋭利な歯が見えた。

「くっそ！」もう片方に持っていた黒刀をランポスの口に押し当て、そのまま力任せに切り裂く。黒刀を振り切ると、ランポスの頭の上半分が床に落ちた。

その勢いで、横にいた他のランポスの首めがけて、左手の赤刀を横に薙ぐ。

血飛沫があがった。

無我夢中だった。俺は後半どのような動いていたか分からなかった。生き残りたくてただただ必死に二振りの刀を振り、気づいたら周りは鮮血と青い死体と返り血で血だらけの自分と晃太がいた。

呆然と立ち尽くしていると、晃太が舌打ちをしたのが聞こえた。

「足りねえな」不満そうに呟くと、長刀を鞘に収める。カチンという鏝が鳴った音と共に、晃太の眼にあった闘争心が消えた。

「陸、怪我してないか？」屈託のない笑顔で俺に聞いている。そういうところはほんとに変わっていない。昔からこいつはそうだった。一つ年上だっただけなのに、それだけで俺や美里の面倒をいつも見てくれて、美里が晃太を頼りにしているのを見ると少し妬けていた。

「ああ大丈夫だ」俺も笑って返事を返す。こいつの片目を潰してしまった俺がやっていいことなのかはわからないけど、なぜかそうしなくちゃいけないような気がして、気づいたら自然に笑っていた。

「さてと・・・」黒刀と赤刀を宙で振り、血を落とすと、鞘に収めた。それと同時に、道場の片隅に拳銃のホルダーを胸に抱いたまま、座り込んでガタガタと震えている森を見る。

「お前も来い、俺たちと一緒にいたほうが安全だろ？」多分こいつは動かないなと思うて、森のもとに行こうとした瞬間だった。

ギヤあああああああつアつアあつアアアア！！耳をつんざく咆哮。そしてそれと一緒に何かが爆発した。

振り向くと、剣道場の窓から見える教室から紅い炎が噴いていた。

4話（後書き）

森君です今のところこの子だけモデルいません

ただ武器は友人が前に言っていた（二丁拳銃ってかつこよくねえ？）

がこの子を作るきっかけです

あとやっぱり全員が切りまくるのは話として成立しない気がしてこ
ういうキャラです

感想批評お待ちします

5話（前書き）

前回の更新が8月とかなり間が空いています
こまめに更新しようと思うのですがなかなかPCを
いじる時間がないのでまたあいてしまいそうです
ちよつと余裕できたんで頑張ってみます

5話

廊下は騒がしかった。

校庭の上に赤い竜が旋回しながら飛んでいるからだ。

30分ほど前に突如現れた赤い竜の存在は、今までに聞いたことのないような叫びで全校生徒にその存在を知らせた。

騒ぐ生徒の声を聞いていると、あの竜の名前であろう、リオレウスという単語が何度も聞こえる。さらに耳を澄ませると、あの竜はゲームの存在だとか、わけのわからないことを言っていた。

ゲームの存在だったらどうということなのだろうか？3D映像？集団幻覚？幻覚の詳しいことは知らないが存在を知らないものを幻覚で見るとはなんてことはないと思う。

だったら前者だろうか？その可能性も無い。そこまでの技術があるはずがないからだ。

とにかく、目の前を旋回しながら飛ぶ赤い竜は私の常識を一蹴するような存在ということだけはわかった。

なんだか疲れて来て、急に座りたくなった。

誰もいない教室に入り、自分の席に座って突っ伏す。

朝から嫌なことばかりだ。陸の古傷を抉るようなことを言ってしまうたり、朝練で晃太の脇腹打っちゃうし。

陸のことは晃太からまだ口止めされている。言わないでくれって言っただって、言わなくちゃ陸は解放されない。

なんだかすごく鬱な気分だ。廊下の喧騒がさらに私を落としていきそうに嫌になる。

保健室で寝てこよう。そう思い立ち上がった時だった。

ものすごい爆音と爆風が私の体を跳ね飛ばした。壁が吹き飛び、炎が飛び散る。いくつかか人の影をしたものも飛んできたが、何なのかは知りたくなかった。

私の体が窓の下の壁に当たり、強い衝撃が襲う。

私の意識はそこで途切れた。

校舎から火が噴き出す。俺と晃太は愕然とその様を見上げていた。

「あの教室・・・美里！！」晃太が走り出す。

「おい！晃太！」止めようとしたが、遅かった。晃太はもう道場を出ようとしていた。

森の奴はいきなりのことにポケーと突っ立っている。

「おら行くぞ森！！」森のケツに蹴りを入れて覚醒させる。

「ごっ、ごめん。暁君」嫌々のくせに着いてくるんだな、こいつは・・・。

俺と森が外に出ると、あちこちに青い小竜・ランポスが見えた。

校庭の上を見ると、学校の一角を破壊したりオレウスがまた、空を旋回している。晃太はすでに、校舎に入ろうとしていた。

見失っては不味い。ましてやこんなランポスが徘徊するような校舎の中で一人にするのは人間としてまずい。

もうすでに校舎の中に入った晃太の後を追いつける。森もあとからちゃんと着いて来ているようで一安心だ。

校舎に入る開けっ放しの出入り口にあと10mというところで、校舎内から数人の生徒が校舎の中から飛び出してきた。

その数人は俺達には目もくれず、校門に向かい逃げていく。俺と森は立ち止まり、その生徒の背中を見ていた。

「僕達も逃げたほうがいいんじゃない・・・」

「今は晃太を追う。逃げるのはそれからだ」【この学校の敷地は、この世界から隔絶される。外部との連絡は一切断たれる。もちろん外にも出られない】浅葱先生の手紙の一文が思い浮かぶ。浅葱先生がたとえ手紙でも嘘を言うというのは信じられないが、世界から隔絶されるなんていう物理的にありえない言葉もとても信じられるものじゃない。

「よし」逃げられるか確認するのは後だ。今は晃太を追い、美里も助ける。

「なんですか？」森が訳が分からないと言っているような顔をしている。俺は森の肩に手を置く。

「さっさと行くぞ。ランポス見つけたら銃ぶつ放せ」校舎内に入り、教室を目指す。

階段を上っていると降りてきた何人もの生徒と肩がぶつかる。それでも俺は階段を必死に登った。降りてくる生徒の顔に俺が探している少女の顔は無い。

(美里・美里・)頭の中を支配するのは一人の少女の存在だ。やっと美里のクラスがある階に着く。廊下を見て、驚愕する。

地獄だ。壁中が黒ずんで、ところどころから火が出ていて、壁は一部が無くなっており、その破片がそこらじゅうに飛び散っていた。嘔吐感が堪えられなくなり、その場で吐く。さっきので無くなっていた胃の中からは胃液しか出てこない。奥歯を噛んで足を進めた。生きている生徒もいた。でも今の自分には美里の事以外に考える余裕などない。美里の無事を確かめて、他の人間のことを考えるのはそれからだ。

美里の教室の前。扉があっただろう場所には、歪な穴。中に入ると10人ほどが倒れている。俺は一人一人の顔を確認していった。

「おいおい・・・こんなまで居やがるのか」1階から2階に登りきったとき、俺と森の前を巨大な獣がつきあたりの廊下からのそのそと歩いてきた。

ブルファンゴ。ゲームの中ではそう言われて、対ボス級モンスター

戦では真つ先に排除されてゴミ同然に扱われている巨大猪。ゲーム中ではしょっちゅう吹っ飛ばされるが何度も吹っ飛ばされて無事なのはゲームのキャラだけだろう。

「あ、あか・・暁君！い、猪！」全身をガクガク震わせてブルファンゴを指さす森。

「先に3階に行ってる」2歩進み黒刀だけ抜き右手に持つ。普通の高校生ならここで逃げ惑うのが当たり前のはずだ。確かに死ぬのは怖い。だが今の俺はこの状況をとても楽しいと感じている。憧れつづけたモンスターが眼の前にいるんだ。これが夢でも十分だ。今の状況がとてもうれしい。その考えが間違っていたとしてもだ。

森が3階に上がるのを見送るともう2歩進む。ブルファンゴが俺に気づきこちらを向く。

ブルファンゴが前のめりになりいつ突進してきてもおかしくない状態になるのを見て、俺も右足つま先に力を入れる。

ブルファンゴが突進してくる。速い。3メートル程あった距離が一気に縮まる。上り階段側に転がり避ける。

ベキヤとひしゃげる音とともに金属の手すりが思い切り曲がる。あれが俺に当たったら間違いなく体が潰れる。

ブルファンゴが向き直る前に動く。後ろの壁を蹴ると黒刀を構えて、ブルファンゴに突進した。

すれ違うように切りつける。ブルファンゴの体は思ったよりもずつと硬く刃が思ったよりも深く入らない。それでも十分な深さで刃が入り、そこから血が噴く。ブルファンゴがゲームで出すような叫び声をあげ、ひるむのを見ると、そのまま何度か斬りつける。

とどめ。そう思いながらブルファンゴの頭に黒刀を突きたてようとした時だった。ブルファンゴの頭が跳ね上がり、俺の腹を突く。鉄パイプで殴られたような衝撃で腰が折れる。腹を押さえて、うずまつてしまった。そこに容赦なくブルファンゴが突進してきた。

「ぐああ！」後ろの壁にふつとばされる。ブルファンゴも満身創痍だったから全開の力ではないが十分内臓を破裂させられそんな威力

だ。

もう一度突進してくる。だが俺には避ける力は残ってはいない。

あっやばい死ぬ。自分でもそこまであっさりした感情が出てくるとは思っていなかった。

俺の命。あと1メートル。

グシャ。

.....。

5話（後書き）

次回よりヒロイン登場です

6話

リオレウスのプレスが校舎にあたり全校がパニックになり始めたころ・・・。

「お嬢ー！どこですかー！」明るめの茶髪。癖のあるセミロングの髪に身長が少し小さな少女がざわつく校舎内を走り回っていた。彼女は彼女の一番大切な人を探している。それは彼女の仕事でもあるが、彼女は進んでその仕事をやっている。それなのにこの状況でいつの間にか隣から消えていた彼女の大切な人。不覚だ。そして悔しい。少女は軽く泣いている。

「お嬢ー！！」全力で校内を走り回る彼女の目の前に青いトカゲが現れた。

ギシャー！ トカゲが威嚇する。口には鋭い牙。手にもなんでも切れそうな爪。

「邪魔じゃボケーー！！」とび蹴りでトカゲが吹っ飛んだ。彼女はまるで落ちてるゴミの横を素通りするみたいに駆け抜けていく。要は存在を忘れている。

（お嬢〜）心の中でその人の姿を思い浮かべる。作られたような腰まである長い黒髪。触れたら汚れてしまいそうな白い肌。少しつった瞳にグラビアモデルをも打ち負かせるようなプロポーション。完璧だ！鼻血が出そうだ！というのは彼女の感想だ。

しばらくすると彼女と彼女の大切な人が在籍しているクラスの前に来ていた。

扉を開けて入る。誰もいない。この騒ぎが起きたころ彼女たちは科学室で実験をやっていた。結構距離があったから外に逃げる奴が居てもここに帰ってくるやつはいないのだろう。教室を出ようとした時だった。彼女は教室の隅に何か大きなものが立てかけてあるのに気づいた。

鉄板に握る場所がついたものだった。それは巨大な剣。大剣。

あつやばい死ぬ。

巨大な猪の姿が俺の視界いっぱい広がっていく。白い二本の牙。あれが今から俺の体に突き刺さる。痛そうだがなんだか惨めな死に方だ。ゲームの中じゃブルファンゴに殺されたなんて笑い話にもならないってのに、現実じゃ違う意味で笑い話にならない。晃太や美里は泣いてくれるかな？あんなことをしたのに俺のために泣いてくれるか？

「ハハ・・・死ぬのも悪くねえかもな」そんなことを呟く。不意に視界の隅・・・ブルファンゴの左側から銀色の閃光が走った。

ドスッ それはブルファンゴの体にあたり、見えなくなる。それは槍だ。モンハンに出てくるような槍ではなく、戦国無双みたいな槍。長い棒の先端に鋭利な鉄片がついた奴だ。

それと同時にブルファンゴが止まった。その身体から出ていた柄の先を眼で追う。

綺麗な白い手と、スカート。驚いたことに女子だ。さらに視線をずらしていく。

さらに驚いたことに知っている人間だった。いや知っているとというのは語弊があるかもしれない。俺が一方的に知っていただけだ。クラスの男達がアイドルだ妖精だ雪乙女だと写真を見せながら熱心に語っていたのを覚えている。名前は確か夜冬吹雪。こんな寒そうな名前はなかなか忘れる事が出来ない。

ブルファンゴの体がこと切れて倒れる。黒刀を持った右手に力をこめて、痛む体を立ち上がらせる。

「大丈夫・・・ですか？」ブルファンゴの体から突き刺した槍を引き抜きながら、夜冬吹雪が控え目な声で聞いてきた。

「ああ・・・うん、助かった。ありがとう」抜いたままの黒刀を腰の鞘にはめる。一つの動作をするだけで、体が痛んだ。痛みを奥歯で

噛みしめて我慢する。

「怪我してますよね？どこですか？」雪みたいに白い両手が俺の体を支える。こんな華奢な手で槍を突き刺したのかと思うと、とても信じられなかった。そうだ。この槍はどうしたんだろう？浅葱先生の手紙には校内の至るところにあると書いてあったが、拾ったのだろうか？まずはそれを確かめなくてはいけない。

「夜冬・・・だろ？4組の。その槍は？」目の前に夜冬の顔を見据える。あまりに綺麗な顔立ちだった。だがそんなことに気を向けている場合じゃない。

「お答えしますから今は傷を見せてください」言いきられてたじろいだ俺自身を少し情けないと思った。

観念して夜冬に支えられながら近くの教室に入り、椅子に座らされる。教室は確かにクラスのものだが、中には誰もいない。誰もいない無人の教室で美女と二人きりなんて、青少年としてはなかなかあることではないと一瞬だけ思ってたやめた。いままで気付かなかったがブルファンゴに突き上げされたとき牙が脇腹をかすめていたらしく、わき腹がひどく傷む。他はそうでもない。

「折れてはいませんが多分骨にひびが入っていますね」夜冬が痛む脇腹を軽く触りながらそう診断する。あばらが折れるのは初めてではないからなんとなく感覚でわかってはいたが、改めて言われるとズシンとした重い痛みが脇腹を覆った。

「動けるから大丈夫だ・・・」嘘ではない。だが肋骨が折れたくらいで止まるわけにはいかない。

「どこか行くところがあるんですか？」

「・・・」黙って頷く。その後夜冬は軽くため息をつく、俺の眼を見据える。

「私も行きます」

地獄のような教室前を見て、胃の中の内容物をすべてぶちまける。拒否反応と自己防衛本能が自分の足を止めさせるために何度も胃液を逆流させる。

いつからこの学校はモンスターパニック映画の舞台になったというのだ。ほんの2、3時間前まで自分は普通の世界にいたのに、気がついたら恐竜が闊歩する異世界に紛れ込んでいる。そして自分は恐竜を刀で斬り殺す二人の男子生徒に身を守ってもらうために一緒にいる。飛んだ自己防衛だ。あの二人と一緒にいれば安全だと思っていた自分が馬鹿だった。こんなことになるならひとりトイレに籠っていればよかったと心底思う。でも心の片隅で二人の男子生徒の雄姿をもっと見たいと思う自分が居たのに気づいたのはさっきだった。巨大な猪が目の前に現れたとき、暁君は自分の命が無くなってしまいかもしれないのに僕を上階に逃がしてくれた。それを見て昔見たヒーローものを思い出した。なんの見返りも無いのに自分の命をかけて他人を守るという行為は僕のなかのヒーロー像と暁君をだぶらせた。

同時にヒーローになりたいという幼いころのどうしようもない夢が湧き上がって来てしまった。

すごく怖い。でも暁君の行為は僕に少なからずの勇気をくれた。だからその分のお礼をするために暁君の言ったとおり古谷さんの所に行こう。そう思った。

口もとの胃液を手でぬぐうと、もうすでに命の無い黒い塊を見ないように廊下を歩きだした。

「古谷さん！」長方形の入口だったものは周りの壁を飲み込み歪な円を作っていた。その円の中に向かって呼びかける。中には古谷さんと後ろのロッカーに背を預けて気を失っている女子生徒がいた。

「森君・・・」少し驚いた顔をして僕を見る古谷さんの顔は心底安心したような気の抜けた表情だった。それをみて気を失っている女子生徒の命が無くなっていないことを悟った。

「無事だったんですね？」

「ああ．．．だけど足が．．．」視線を足元に移すと、靴やソックスが脱がされた右足首がひどく腫れて青紫色になっていた。

「ひどい腫れ方じゃないですか！」

「ああ．．．見つけたときに机の下にいて．．．今は気絶してるからいいが起きたら泣きわめくだろうね．．．」

「今すぐに病院に連れていきましよう」それがいい。実はさっきこの騒ぎを警察に知らせようと携帯電話を開いたところ圏外の二文字がでて絶望した。携帯電話が使えないなら自力で病院に行けばいい。ついでに警察に駆け込んでいま学校で起きていることを知らせなくてはならない。

古谷さんは急に俯いてしまった。そして数秒経つと顔を上げて僕の眼を真剣にみて信じられないことを言い出した。

「ここからは．．．この学校からは出られない」一瞬理解が追い付かなかった。

「俺達も試してないから確証はないが、この学校から出ることは多分無理だ」

「．．．どういう．．．ことなんですか？」啞然とする僕にゆっくりと語り始める古谷さん。剣道部顧問の浅葱先生が道場からいなくなると同時に、竜が現れたこと。その後発見した浅葱先生の手紙。そして浅葱先生が自分たちに嘘をつくような人では無いということまで話してくれる。僕はただこの学校から出られないと宣告されたことがショックで話は半分以上頭に届いていなかった。

「でも、まだ出れないと決まったわけじゃない」元氣付けるつもりで言ったであろうその一言は僕を元氣付けることはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8442e/>

School=MonsterHouse

2010年10月10日22時04分発行